

■ ドル/円は基本強気の流れが継続中だが…

前回の本欄では「ドル/円の113円前後の水準には複数の重要な節目が集中している」という点に注目し、それだけに「これらの節目を一気にブレイクする展開となれば、そこから一段の上値余地が広がることとなろう」と述べた。

実際、今週8日には「今年3月高値から4月安値までの下げに対する61.8%戻しの水準」や今年1月高値と3月高値を結ぶレジスタンスライン、さらには89日線や一目均衡表の日足「雲」上限などといった重要な節目を次々に上抜ける展開となり、その後も順調に上値を伸ばし続けて執筆時点では114円台前半の水準にまで達している。

先週3日に発表されたFOMC声明文の内容や5日に発表された4月の米雇用統計の結果などを受けて、目下の市場では米6月利上げ期待が膨らんでおり、基本的にドル強気の流れが継続している。加えて、先週7日の仏大統領選・決選投票でマクロン氏の勝利が決まり、欧州の政治リスクへの警戒が一服したのにも拘らず、その後、ユーロの上昇が頭打ちとなったことでヘッジファンドなどがユーロのロングポジションを手仕舞い、相対的にドル優位の状況となっていることも見逃せない。

すでに、ドル/円は昨年12月高値から今年4月安値までの下げに対する50%戻しの水準を上抜けており、次に意識されやすいのは61.8%戻し=114.65円あたり、あるいは重要な心理的節目でもある115円ということになる。

もちろん、3月10日高値=115.51円も大いに意識される場所だが、同水準はトランプ大統領就任以降のドル/円の最高値である。それ以上に対円でのドル高が進むことに対して、米政権側はとりあえず不快感を示す可能性もある。そもそも、仏大統領選の第1回投票が行われた翌日である4月24日以降のドル円の上昇はかなり急ピッチであり、普通に考えれば115円前後の水準をもって、とりあえずは上昇一服&一時調整となっておかしくない局面と言えるのではないだろうか。

一方、ユーロ/ドルは前述したように仏大統領選・決選投票を通過して以降、軟調な展開を続けており、結果的に週足「雲」下限や62週線、昨年5月高値と11月高値を結ぶレジスタンスラインなどに上値を押さえられるような格好となっている（下図参照）。これらの節目（ことに週足「雲」上限）をすんなりと上抜けてこない限り、一段の上値を追うことはなかなか難しい。

目先は、そろそろ下げ一服となってもいいところではないかと思われ、当面は節目の1.0850ドルや21日線（現在は1.0830ドル）、4月24日安値=1.0821ドルなどが下値の目安として注目される場所…。これらを下抜けてくるようだと、チャート・フェイスから受ける印象は一変するものと考えられ、当面は注視しておきたい。

